

資料名 「エルマおばあさんからの『最後の贈り物』」(光村1年 92p 本指導案は「生命の尊さ」に絞ったが、B7「おもしろい」C15「家族愛、家庭生活の充実」での展開も可能)

1. 本教材について

▼本教材のテーマの中心の一つは、どうしたら尊厳を持って死を迎えることができるか、また、死に行く人に対して、どう支援したらよいかということである。

▼1年生の教科書には「死」について考える教材が他に三つある。「ひまわり」は、突然の災害による「死」について、「さよならの学校」では、「死んでいくものを見送った孫の立場」を、「捨てられた悲しみ」では人の人生の一時期を伴走した生き物の生命について考える機会になると思われる(本教材にも猫が登場する)。いずれも「死に向き合い」、「死について考える」ための教育と捉えることができる。いずれにせよ、「死」を考えることは「生」を考えることだ、ということを踏まえたい(したがって余裕があればB7、C15への発展もかんがえたい)。

▼2,3年生にも「尊厳死」や「臓器移植」について考える教材があるので3年間で、計画的に「死に向き合い」、「死について考える」ための教育をすることを考えると良いのではないだろうか。

▼本教材は、「尊厳を持って死を迎える」という点でいくつか重要なことが書かれている。高齢者が多く、近未来に多くの人が亡くなる時代を迎えることになる日本では「死に行くもの」にいかに寄り添うか、という点で子どもたちにも考えてもらいたい点である。子どもたちにとっては、死に行くものに寄り添うことが、自分たちの死(そして生)を考えるための学びになるはずである。

- ・エルマおばあさんは血液の癌にかかったあと、自宅で緩和ケアを受けながら、家族と共に暮らし、静かに息を引き取った。(在宅ホスピスのケア)
- ・エルマおばあさんは人工的な延命措置を断り、家族と、死についても避けることなく話し合っていた。('死'をタブー化しない)
- ・エルマおばあさんは、これまでの人生で意に沿わなかったことなどをふり返り、見直すように努めた。(人生をふり返る)
- ・最後は、おばあさんの希望で夜通しキャンドルに火をともし、家族が付き添った。(遺された者への配慮)
- ・亡くなってから2週間後、遺言にしたがって遺灰を海にまき、皆で盛大にシャンパンを開けておばあさんの人生に乾杯した。

▼本教材は、死に行く者の、遺される者(生者)に対する配慮が書かれていると読むこともできる。余命を家族と共に過ごし、「死」についても語り合い、人生をふり返ることによって、遺された者はエルマおばあさんの「死」に対する準備をすることができた。だからこそ「死」に際してシャンパンを開けておばあさんの人生に乾杯することもできたのである。おばあさんもまた、最後までQOL(質)の高い時間を生きることができた。

▼一方、突然の死は、遺された者に、場合によっては癒しがたい悲しみをもたらすこともある。(参考資料2)

2. 本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

▼言うまでもないが、「死」について考えるに際して、死後、永遠の生命があるなどといった特定の考え方を強制することは慎まなければならない。

▼最近家族などに「死」を迎えた人がいる場合などは扱いを変えたり、扱わない、という選択肢もある。慎重に考えたい。

4. 指導過程

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	これまで扱った「死」についての教材に簡単に触れる。 「死」には3種類ある →自分とは関係ない人の死、自分の死、自分にとって大事な人の死	今も世界中、至る所で誰かが死んでいるが日常的な出来事としか捉えない。しかし自分にとって大事な人の死は限りなく自分の死に近く、死について考えることになる。
展開	教材を読む Q.エルマおばあさんはどんな人? →外出時には化粧、働いて家族を支えた Q.ホスピスって何? →教材の記述に注目 別な定義がないかどうか調べてみよう Q.死に行く人をケアするにはどうしたらよいのだろうか。 →キューブラー・ロスの「死へのプロセス」について Q.エルマおばあさんと家族は「死」について避けることなく話し合ったとあるが、どんなことを話し合ったのだろうか。 →たとえば遺産分配について、弔いの仕方について	どのような生き方をしてきた人か、という視点で考えてみよう。 ホスピスがQOL(生の質)を重視することを押さえたい 日本でもホスピスが増えつつあることを説明する。 「死」へのプロセスについては資料1を参照。 「死へのプロセス」について簡単に説明する 「死」についての話題を避けるというのはどういうことだろうか。
まとめ	エルマおばあさんが皆にくれた「最後の贈り物」とは何か、考えてみよう。 大事な人の「死」を受け入れることは容易ではないことがある。そのことは念頭に置いて考えたい(資料2)。	この問に対する答えは子どもと授業者がともに考えていけばよいと思う。答えは一つではない。遺された者に傷跡を残す「死」を紹介すると理解しやすいかもしれない。具体例については資料2を参照

参考文献 「死とどう向き合うか」 アルフォンス・デーケン NHK 出版 1996年

死の準備教育について書かれた類書の中では包括的に、しかもとてもわかりやすく書かれている。

「死」を子どもに教える 宇都宮直子 中公新書ラクレ 2005年

実際に行われている死の準備教育についてのルポ。

「子どもの宇宙」河合隼雄 岩波新書 1987年

子どもについて書かれたこの本の中に「子どもと死」という章が設けられている。臨床心理学者は「子どもたちは意外に死の近くで生きているし、死について考えてもいる。それに死というものは凄いいもので、おとなの配慮などというもので遠ざけたりできるものではない」と述べている。

参考資料

資料1 死へのプロセス(前掲 アルフォンス・デーケン)

精神科の医師であるキューブラー・ロスがあげている「死が避けられないと知ってから実際になくなるまでの過程の5段階のモデル」のこと。前掲書でデーケンが紹介している。

「否認」：自分が死ななければならないということを認めない。たとえば誤診だなどという。

「怒り」：なぜ自分が死ななければならないのか、という怒り。コミュニケーションが難しい時期。

「取引」：運命と期限付きの約束をすることで死を先延ばしにしようとする。たとえば娘の結婚式に出るまで生かしてほしい、そのためにはつらい治療も我慢するなど。人生の見直しと再評価を行うにはもっとも良い時期である。遺言を書くなど身辺整理を行うにも最適な時期。

「抑うつ」：死によってすべてを失わなければならないということからうつ状態になる。

「受容」：平静に自分の死を受け入れるようになる。

デーケン氏はキリスト者(神父)らしく、この次に「期待と希望」を付け加え、死後の生命を信じる人は、受容の段階から一步進んで、永遠の未来を積極的に待ち望むようになる、と述べている。

資料2 突然の死と遺された者

▼赤ちゃんの突然死：1歳未満の赤ちゃんがかかる乳幼児突然死症候群による死は、親の不注意ではないかと思ってしまう、時にはまわりの人の不用意な言葉などで傷つくことがある。

▼事故による突然死：一刻も早く来てくれ、などといった相手が来る途中で事故を起こし、死亡したような場合、自分の責任ではないかと思ってしまうことがある。

▼災害による突然死：「ひまわり」では大震災の朝、佐々木さんは妻であるりつ子さんとけんかし、そのまま家を出た。午後、大震災による津波でりつ子さんと娘の和海さんが亡くなった。

▼子どもの自殺：自殺は、遺された者には大きな傷跡を残す。中でも子どもの自殺は親にとっては大きな衝撃である。

▼大切な人の死の受容：自分にとって大事な人の「死」は簡単には受け入れられないことがある。喪失感の強さから病気になったり、自殺してしまう人もいる。「大切な人」の死は、多くの人にとって「危機」なのである。「大切な人」の死を取り上げたドラマや小説については「ひまわり」の参考資料3を参照。

資料3 「死」について考えることのできる映画

▼「おみおくりの作法」2015年日本でも公開されたイギリス・イタリア合作映画。たった一人で亡くなった人の葬儀を、取り仕切ることを仕事としている地方公務員、ジョンメイが主人公。亡くなったときにはだれもその死に関心を持たなくても人生の軌跡をたどればたくさんの物語がある。死者を、敬意を持って弔うとはどういうことか、を考えさせてくれる映画。91分。

▼「サウルの息子」 2015 年日本でも公開されたハンガリー人監督による映画。ナチスのアウシュビッツ・ビルケナウ収容所。主人公のサウルは、ナチスが収容者の中から選抜した死体処理に従事する特殊部隊の一員。ある日サウルはガス室で死にきれなかった少年を見つける。ナチスの軍医はすぐに少年の口をふさいで殺してしまう。サウルは少年を息子と思い込み、ユダヤ教の教義に則って弔いたいと考え、ラビ（ユダヤ教の聖職者）を探して奔走する。最初は「お前には息子はいなかったはずだ」などと相手にしなかったまわりのユダヤ人たちも協力するようになり、・・・」収容所という極限状態の中でも、何とか尊厳を持って死者を弔いたいという思いを持った一人のユダヤ人の物語。107 分